

2019 SUPER GT 第2戦

富士スピードウェイ

2019年5月3日(金)

予選 来場者: 35,800人 天候: 晴れ

SUPER GT シリーズ中で、最も観衆を集める第2戦 FUJI GT 500kmレースが開催された。開幕戦は、悪天候により混乱するレース展開で最終的にレース中止となり、我々はノーポイントで終えていた。しかし、LEXUS のホームコースである富士スピードウェイに舞台を移した今大会は、予選でポールポジション争いを展開する活躍を見せた。果敢なタイムアタックの末にコースレコードタイムを更新！しかし、0.23秒差でポールポジションに届かなかったものの2番グリッドを獲得。フロントローから、500kmレース(110周)の決勝レースをスタートすることとなった。



- 予選日午前中のフリー走行では、3番手タイムをマークして LEXUS 勢のトップとなり、好調さをアピール。
- 公式予選では、平川が Q1 を担当。LEXUS 勢トップ、Q1 の 2 番手タイムで Q2 進出を果たした。
- キャンディが Q2 を担当。
- 全てのセクターでミスすることなくクリア。ポールポジションをゲットする可能性が高まったが、僅かに及ばず 2 番手となった。

| Driver    | Car No. | Qualifying 1 |           | Qualifying 2 |           |
|-----------|---------|--------------|-----------|--------------|-----------|
| 平川 亮      | 37      | P2           | 1' 27.499 | P2           |           |
| ニック・キャンディ |         |              |           |              | 1' 27.105 |

|         |                     |
|---------|---------------------|
| 天候/路面   | 晴れ/ドライ              |
| 気温/路面温度 | 22°C/33°C~21°C/32°C |

平川 亮 (37 号車ドライバー)



「フリー走行の走り出しで、最初に感じられたのはエンジンのパワーアップとドライバビリティの良さでした。トヨタ、TRDのみなさんが、この第2戦に向け素晴らしい準備をしてくれました。期待以上に良くなっていて、自信を持って Q1 に臨むことができました。2 番手まで行けたのは、想定外でうれしかったです。エンジンもそうですが、タイヤと路面のマッチングも良くこの結果に結びつきました。決勝は天候も微妙な状況ですので、開幕戦を取りこぼしている分、大量得点を獲得したいですね」

ニック・キャンディ (37 号車ドライバー)



「今回、平川選手も自分もパーフェクトなドライブができたので、2 番手ですがとてもハッピーです。開幕戦と同様に、今回も LEXUS 勢のトップで予選を終えることができたのはうれしいです。2017 年のタイ以来の自分たちにとっては最高の予選となりました。マシンはすごく良くて、平川選手の Q1 から、セットアップを変えることなく Q2 でアタックできました。決勝は、絶対に勝ちたいです。いや、勝たなければいけないと思っています。開幕戦がノーポイントだっただけにここで勝ってポイントをゲットしたい。決勝のセットアップも良いので、自信があります」

小枝正樹 (37 号車エンジニア)



「今日は、走り出しから順調に来ています。Q2 のアタックでは、セクター3 だけが少しタイムが足りなくて 2 番手となりました。マシンのセットアップとエンジンパワーも今回の第2戦はとても良い状況です。36 号車と結果的にタイヤのチョイスが分かれたのは、あくまで結果的なもので、意識して違うチョイスをしたわけではなかったです。そしてソフト系のタイヤをチョイスしたのは正解でしたね。そのタイヤでもロングランのチェックはできているので、決勝にも不安はありません」

山田 淳 (37 号車監督)



「もう一歩でポールに手が届きそうでした。取れなくて悔しいですが、Q2 のニックのドライブはセクター1 から 3 まで自己ベストと素晴らしかったです。満足しちゃいけないけれど、平川もニックも素晴らしい走りをしてくれたので良い予選でした。2 番手になったのはセクター3 のタイム差だけでしたね。第 2 戦に向けてクルマを速くしていただいたトヨタ、TRD さんに感謝します。決勝では、最初のステイントでタイヤを労わりながらライバルの状況を見て作戦を考えます」

舘 信秀 (総監督)



「ポールを獲れたと思った喜びと、やられたという悔しさ、ガッカリした気持ちの落差が物凄く大きかったですね。人間というのは、気持ちの落差で疲労を感じますね。それを実際に体感した予選でした。疲れました。本当に疲れました。しかし、初戦の岡山から確実に速さを増しています。決勝のスタートは、フロントローで十分に勝てるチャンスを得ました。決勝の後には、喜びだけを感じさせて欲しいですね。大いに期待しています」

2019 SUPER GT 第2戦

富士スピードウェイ

2019年5月3日(金)

決勝 来場者: 56,000人 天候: 雨のち曇り

決勝日、午前中は五月晴れに恵まれたが、徐々に雲が広がり冷たい風が吹き始め、天候の悪化を予想させる状況となった。そして、決勝スタート直前に雨が降り始め、一気にコースコンディションはウエットへと変化。レースは、悪天候を鑑みセーフティカーランでスタートし、3周目にレース開始となった。その直後のダンロップコーナーでトップに躍り出た。雨量の変化で、順位を入れ替えながら序盤を走行。落雷と強雨となりセーフティカーがコースインしたが、すぐに赤旗中断。再開後、一時トップに立つが、ピットインに際し若干のタイムロス。コースインして2周目に他車と接触してスピン。ホイールにダメージを受けて再びピットイン。大きく順位を落としたが終盤は追いついて7位フィニッシュ、4ポイントを得た。



- ニック・キャンディがスタートドライバーを担当。
- セーフティカースタートで2周を走行した後に3周目からレース開始。キャンディは果敢にBコーナーの進入でトップ車両のインを奪いトップに立った。
- 雨量が増しコース上の水量変化により、異なるタイヤメーカーのレインタイヤ性能の違いで順位を入れ替えながら序盤を走行。
- 3位を走行中の13周目に落雷と雨が強まりセーフティカーがコースイン。2周後の15周目に赤旗中断。30分後にレース再開のアナウンスがされた時点で雨は止んでいた。
- セーフティカースタートで19周目からレース再開。引き続きステアリングを握っていたキャンディは、不安定なコンディションで再びトップに立つ。
- コースが乾き始め、レインタイヤではタイムが落ち始めたため41周目、4位時点でピットイン。ピットでは各車がピットインし混乱。36号車も同周にピットインしていた為、再発進の際に一旦手押しで戻さざるを得ず、5秒近くタイムロス。



- 第 2 ステイントを平川がスリックタイヤでコースイン。走行ライン以外はまだ水が残る難しいコンディション。
- コースインして 2 周目に 1 コーナーでラインを外し若干オーバーラン。アウト側にいた車両と接触しスピン。この際に左フロントホイールにダメージを受けてしまった。これによって再度ピットインし、左フロントタイヤのみを交換しコースに復帰した。この時点でクラス最後尾まで順位を落とす。平川は、6 位まで順位アップしピットイン、キャンディに交代した。
- キャンディの最終ステイントは、コース復帰時点、12 位。そして、次々に前車をパス、110 周レースの 87 周時点で 7 位までポジションアップし、そのままチェッカーを受けた。

| Driver    | Car No.             | Race Result/Fastest Lap |           |
|-----------|---------------------|-------------------------|-----------|
| 平川 亮      | 37                  | P7                      | 1' 30.940 |
| ニック・キャンディ |                     |                         | 1' 30.596 |
| 天候/路面     | 雨のち曇り/ウエットのちドライ     |                         |           |
| 気温/路面温度   | 18°C~13°C/25°C~17°C |                         |           |

平川 亮(37 号車ドライバー)



「マシンに乗り込んでコースインしようとした時に 36 号車がピットインしていたので、押し戻されてからスタートしたので 5 秒はロスしていると思います。そして、レースに復帰してから 2 周目だったと思いますが、1 コーナーで水に乗ってうまくブレーキングできず、アウト側に居たマシンと接触してしまいました。その際のホイールにダメージを受け左フロントの内圧が上がらず、グリップしないので再度ピットインして交換しました。その後もカウルのダメージで高速コーナーのバランスは少し変でしたね。ポイントは取れましたが、次戦では NSX が強そうですから、頑張らないといけません」

ニック・キャンディ(37 号車ドライバー)



「勝つチャンスはあったレースでした。しかし、いろいろな事が重なって勝てなかったです。最初のスタート、その後のレース再開でもトップに立ったけれど、コース上の雨の量、そしてコースが乾き始めてからは、ドライビングが難しかったです。最初のピットインでタイムロス。他車との接触で順位を下げてしまった。ボディーカウルにもダメージを受けていて、高速コーナーでバランスが悪くてドライブしづらかった。7 位まで順位アップできたけれど、勝てると思っていただけに、レース後は残念で気が重かったです」

小枝正樹 (37 号車エンジニア)



「タイヤメーカーのレインタイヤ性能の違いによって雨の量で順位を入れ替えることがありましたが、ニックのスタート直後のパッシングは、さすがでした。しかし、ピットインの際に数秒ロスしていい、また、他車と接触してしまい無線で亮が左フロントタイヤの内圧がおかしいというので再度ピットイン。上位陣との争いから外れてしまいました。接触した際にホイールにひびが入ってしまい、タイヤの内圧が落ちてしまったようです。その後の追い上げでなんとかポイントだけは獲ることができました」

山田 淳 (37 号車監督)



「序盤のニックの快走を見ていただけたら、勝てるチャンスは十分にあったと誰もが思うと思います。少なくとも表彰台には立てていたでしょう。しかし、チームのミスでピット時のタイムロス、そしてコース上での接触と、何か流れが一気に崩れてしまいました。しかし、ドライバーたちがその状況下で順位を上げて来てくれたのは素晴らしかったです。ラップダウンにもならずフィニッシュできたのは、ドライバー二人のおかげだと思っています」

舘 信秀 (総監督)



「勝てると思っていました。しかし、レースというのは、難しいですね。いろいろな事がありすぎました。そして、全てが悪い方向に行ってしまった。しかし、二人のドライバーの走りには感動するくらいに満足しています。ニックが2回トップに立った時は、彼らのパフォーマンスを考えるとそのまま行けると思っていました。最初のピットインから悪い方向へ流れが変わってしまいましたね。LEXUS の 38 号車が優勝しているだけに、そのマシンとトップを争っていたのだから、少なくとも表彰台に立ってもおかしくなかったです。応援していただいている皆様には、本当に申し訳ないです。次戦、また頑張りますので期待してください」